九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Aurora Leigh as Barrett Browning's Defence of Poetry : Mediating between Spirituality and Modernity

平井, 裕美

https://hdl.handle.net/2324/1470508

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

区分	甲

論文題目　*Aurora Leigh* as Barrett Browning's Defence of Poetry: Mediating between Spirituality and Modernity
(バレット・ブラウニングによる詩の擁護としての『オーロラ・リー』：精神性と近代性を繋ぐもの)

氏　名　平井　裕美

論　文　内　容　の　要　旨

本稿は、バレット・ブラウニング『オーロラ・リー』が、近代社会における詩の重要性を擁護する作品であるとの主張を展開する。

第一部では、第一章で本作品についての従来の議論を概観し、主にフェミニズムによる先行研究を批判的に継承することで、本稿の主張を学説史上に位置づける。バレット・ブラウニングは、本作品を通じて、詩には、一見対立として捉えられる二つの領域を繋ぐ作用があることを示していくことで、精神性と物質性の乖離が鋭く感じられる近代において、詩の社会的重要性を訴えたのである。

第二章において、二つの側面から、本稿の主張をより広範な文脈に位置づける。まず、詩と散文作品の対立を繙くことで、本作品が近代社会を題材とする際に、小説的要素を取り込みながらも、詩として書かれたことの意味を探る。さらに本作品が、芸術家小説であると同時にヴィクトリア朝詩人の実験的試みの一例でもあることを指摘する。二つのジャンルはいずれも近代社会を表現することを目指した試みであり、近代の特徴の一つである流動性を反映している。本作品において詩的霊感を表現するのにしばしば用いられる流体の比喩は、この近代的流動性に呼応するだけでなく、近代的流動性を取り込みつつ、精神性と物質性に代表される対立するかに見える二つの領域を繋ぐ詩の媒介的作用を示唆している。

第二部では、第三章において、オーロラが、詩人は同時代を描く叙事詩を書くべきだと主張することに焦点を当てる。このオーロラの主張は、本作品の中心に位置する第五巻においてなされる。叙事詩は、19世紀の批評的文脈において、過去の世界と分ち難く結びつけられていた。したがって、叙事詩と近代は相容れないと見なされていたのである。同時代を描く叙事詩という本作品の問題設定は、この当時の認識に真っ向から反対するものであった。

オーロラは、自分の生きた社会を題材に叙事詩を創作した詩人のモデルとしてホメロスを挙げるだけでなく、「ホメロス問題」にも言及する。「ホメロス問題」は、ホメロス叙事詩の真正性への疑念に発し、聖書の権威を揺るがすことにまで繋がった喫緊の社会問題であった。同時代を描く叙事詩人のモデルであるホメロスの著者性を疑い、神を中心とする宇宙観に疑義を呈する「ホメロス問題」は、オーロラにとって重要な意義を持つ。オーロラは、「ホメロス問題」の中心的人物であったF. A. ヴォルフだけでなく、18世紀に結成されたディレッタント協会の一員であったリチャード・ペイン・ナイトを痛烈に攻撃する。オーロラの叙事詩を巡る議論が、「ホメロス問題」への言及を通じて、単なる芸術的野心であることを越えて、精神性と近代性をもその射程に含むことを示していく。

第四章では、西欧文化に深く根ざした女性の表象の対置（the fair woman and the dark woman）を分析の軸とし、オーロラが金髪であることの意味を探る。本作品が影響を受けたスタール夫人の仏小説『コリンヌ』(1807) においては、主人公は黒髪であり、金髪と黒髪の象徴する女性性の対比は、英国とイタリアの対比、さ

らに比喩的に現代と過去の対比を示唆している。まず、『コリンヌ』を初めとする19世紀小説にこの女性の表象の対置が広く浸透していることを概観し、オーロラが、イタリア女性を母に持ち、求婚を断って執筆活動に専心することから、金髪ではなく、濃い色の髪であることが期待されると指摘する。さらに、バレット・ブラウニングのバラッド作品の検討を通じ、バレット・ブラウニングの用いる金髪には、因習的な女性性への批判、精神性といった意味が込められることを論じる。最後に、オーロラの金髪が、イギリスとイタリア、現在と過去、小説世界的な日常性と詩的な宗教性、物質性と精神性といった諸々の二項対立の中間領域にオーロラが位置づけられることの象徴であると論じる。オーロラの表象は、二つの領域を繋ぐ詩人の媒介的役割を体現するものなのである。

第三部では、本作品全体で、芸術と愛の対立が昇華されていくことを論じる。芸術と愛・結婚の対立は、本作品が、第五巻を中心とする二部構成であることに関連づけられて論じられてきた。前半は回想録として執筆され、芸術家小説の要素が強いのに対し、後半は出来事が生じるたびに記録される日記風の形式であり、オーロラは故郷のイタリアに戻り、最終的に従兄弟のロムニーと結ばれる。

第五章では、本作品の二部構成が固定的なものではないことを示すために、まず、本作品の語りの形式を概観し、第五巻以降の日記風の形式が、第三巻にも見られ、後の形式を先取りしていることを指摘した上で、芸術家を象徴する神話的人物が、第五巻を挟んで、第一巻、第三巻、第七巻に見いだされることを論じる。芸術家の象徴は、そのときどきのオーロラの成長に呼応し、オーロラが二つの領域を繋ぐ詩人として成長していくことが読み取れる。

第六章では、第五巻で同時代の叙事詩を書くべきだとの主張することに示されるオーロラの詩人として成長が、第三巻、第四巻での労働者階級のマリアン・アールとの出会いによって可能になったことを論じる。マリアンは、オーロラに当時の社会の現実に触れる機会を与えた。オーロラの詩的創造力は、流体の比喩で語られ、マリアンの象徴する近代的流動性をその源とする。また、オーロラがマリアンに寄せる共感は、オーロラに詩作の幅を広げる機会を与えている。近代社会を詩作品で描き出そうとする試みそのものが、本作品の主題となっており、近代における詩の存在意義を肯定するものとなる。

第七章では、第七巻で示されるオーロラのさらなる成長と、第九巻でのイタリアでのロムニーとの和解が、第六巻でオーロラがマリアンと再会し、マリアンと子どもの愛に触れたことで可能になったことを論じる。まず、本作品における愛が、恋愛感情や夫婦愛に留まらず、親子愛や芸術家の作品に対する愛、また神の愛を含むものであることを指摘し、オーロラが自分のロムニーに対する愛情を認めないことは、両親の喪失に伴って愛情と死を結びつけたことに由来すると論じる。次に、神話的人物アドニスへの言及を含む比喩の分析を通じて、マリアンと子どもの愛情溢れる様子が、オーロラに愛情と生命を結びつけるように促したことを論じる。芸術的創作の表象において、恋愛・親子愛・神からの霊感は、流体の比喩を通じて重ね合わせられており、オーロラはマリアンの親子愛に触れることで、自分の作品を受け入れることが可能になり、さらにロムニーと和解するに至るのである。第八巻でロムニーは、オーロラが第五巻で完成させた本を称賛する。オーロラの作品は、第三巻、第四巻でオーロラがマリアンに示した共感と愛情に裏打ちされたものであり、愛の主題は、すでに前半からオーロラの執筆を支えていたことが示唆される。語りの二部構造が固定的ではなかったのと同様に、芸術と愛・結婚という一見対立する主題もまたオーロラの執筆を通じて繋ぎ合わされ、詩の媒介的な作用が表されている。

以上のように、バレット・ブラウニング『オーロラ・リー』は、小説詩という形式において、詩と小説が結合されているだけでなく、叙事詩と近代、金髪と濃い髪、過去と現在、芸術と愛といった対立が、オーロラの詩作や人物表象を通じて繋ぎ合わされている。このように、本作品は、さまざまな地平において、詩の媒介的作用を表現することで、究極的には精神性と物質性を繋ぐものとして、近代社会においてもなお詩が重要性を持つことを訴えかけているのである。